

# ショッピングセンターを盛り上げよう！新たなカタチの協働学習

金沢市立十一屋小学校 教諭 平口 絵理  
金沢大学附属小学校 教諭 福田 晃

キーワード：社会に開かれた学び、協働学習、地域活性化、コラボノート for School

## 実践の概要

本実践は、校区にあるショッピングセンターアルコ（以下、アルコと表記）を活性化することを学習のゴールとした教科横断的に半年間かけて行った実践である。

また、この学習は十一屋小学校とアルコのみ関係で終止するのではなく、金沢星稜大学の教員志望の学生がTAとして関わり、さらには金沢市まちづくりチャレンジ事業に採択されたことから、金沢市市民協働推進課からの協力も得て行なった。さらに、本実践を行うにあたり、（株）ジェイアール四国コミュニケーションウェアによるコラボノート for Schoolを活用することによって、社会と学校を隔てる壁を崩すことを試みた。

## 1. はじめに

新学習指導要領総則には、「社会に開かれた教育課程」というキーワードが位置付けられており、今後一層、学校が社会と接点をもつことが重要になってくる。児童にとって、自分たちの地域のことを知ることや、地域住民から実際に話を聞くことには非常に有用なことであり、これまでも学校教育の中に多く位置付けられてきた。

だが、社会とつながる学習において課題となるのは、児童と協働する相手側の本気度の差である。言うなれば、地域の学校からの依頼だからと義理で協力することがこれまでに多く見られてきた。本実践で目指したのは、実践に関わる全ての人が、同じゴールに向かって本気で取り組む姿である。

## 2. 実践内容

### 2.1 学習の方向性の共有

学習の導入では、社会科の学習でアルコに見学に行き、その際にアルコ会長から店舗の減少とともに年々客足が遠のいているため、活性化に向けて協力してほしいとの依頼を受けるところから始まった。

児童は、子どもなりのアイデアで活性化への取り組みを考えるものの現実とかけ離れたものが多く、アルコ側に提案できるものはあまりなかった。そこで、金沢市の商店街の活性化を数多く手がけてきた民間コンサルタント会社社長に商店街活性化のポイントを説明してもらう場面を設定し、アドバイスをもらった。児童はそのアドバイスをもとに、実現可能な取り組みを考え、行っていくこととなった。

### 2.2 児童が考えた活性化の取り組み

商店街活性化のポイントを参考にしながら、児童は何ができるかについて考えた。その結果、商店街のことを

地域住民及び保護者に知ってもらうために国語科においてパンフレットを作成する学習を行なった。実際に児童は、8つの店舗の中から一店舗を選択し、インタビューしたことをもとにタブレット端末を活用し、本物に近いパンフレットを作成していった（写真1）。



写真1 パンフレット作成のため取材を行う児童

その後、アルコに興味を持ってもらうために何ができるかを考え、イベントを開催すること、公式キャラクターを作ること、閉鎖的な雰囲気や壁面掲示で明るくすることの3つを行うこととし、これらはアルコ側からの快諾を得て行なった。

ここでは、公式キャラクターの作成について取り上げることとする。この取り組みはアルコ側から大きな賛同を得ることができ、空き店舗を新たなキャラクターの投票会場として利用させてもらえることとなった。児童は、単に思いつきではなく、アルコの名前の由来や働く人々の

思いを聞きながら、キャラクターを考えた。30以上あるキャラクターを校内で投票し、投票数の多かった8つのキャラクターをアルコの投票会場に掲示した。投票数は228票もあり、結果、左の公式キャラクターに決定した（写真2）。



写真2 決定した公式キャラクター

### 2.3 コラボノート for School の活用

本実践は、教室で学びが終止せず、社会との繋がりの中で学びを構築していくことをコンセプトとして行ってきた。これまでもこのような実践は行われてきたものの、手紙でのやり取りや、実際に児童が見学に行くことが繋がりやの主な手段であり、これらを継続的に行うには時間

的制約が大きな負担となっていた。そこで、この課題を解決するために、コラボノート for School を活用し、保護者、大学生、民間コンサルタント会社社長に対し、児童が自分たちの学習の情報を発信できるクロードの環境を整えた。なお、PC室にわざわざ行かずとも、わずかな時間の中で発信できるようにするためタブレット端末を用いることとした。

実際に、自分たちの学びを発信していく係の児童がアルコの投票会場に掲示されることとなったキャラクターの画像を簡単な説明とともにアップした。その発信に対し、保護者や TA の大学生から「アルコにあったキャラクターになっているので投票が楽しみ」といった賞賛のコメントや「名前は一体どうするのか？」といった課題を投げかけるコメントが書き込まれ、児童への反応が得られた（写真3）。

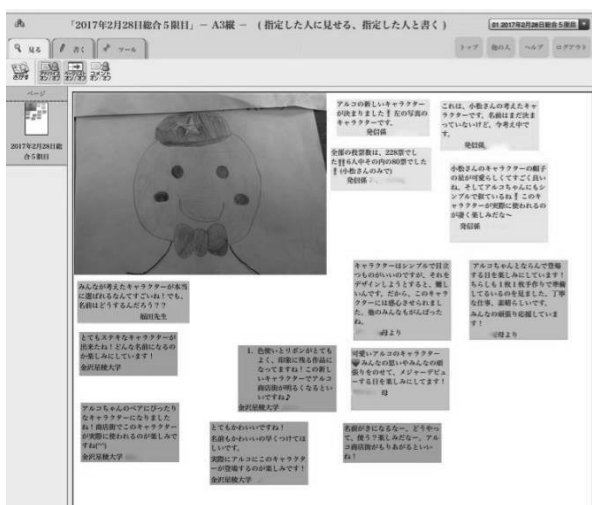


写真3 コラボノート for School の一例

## 2. 4 学習成果報告会の実施

学習を進めていくうちに、徐々に児童の熱意がアルコの方に伝わり、想定もしていなかったことだが、児童の学習成果報告会の会場として空き店舗を利用させてもらえることにもなった。この学習成果報告会には多くの保護者が参観に訪れた。ここでは、アルコを題材とした学習によってどのような変化があったかを発表した（写真4）。



写真4 自分たちの学びを発表する児童

さらに、この学習成果報告会で作成したキャラクターが記載されているハッピーシールを協働推進課からの予算で作成し、お店の人に渡して感謝を伝えた。

なお、この学習成果報告会は、新たな形の協働学習の事例として新聞に大きく取り上げられ、児童は大きな達成感を得ることができた。

## 3. 実践の成果

単元導入時には、大型スーパーに買い物に行く家庭が多かったものの、学習が進むに連れ、家庭で本実践に関する話題を児童が多くするようになり、題材となっているアルコに買い物に行く家庭が徐々に増えていった。また、アルコで働く方々も途中から実践に大変協力的になり、児童と一緒に活性化を目指そうとする姿や言葉かけが増えていった。実際に買い物客が増えたこと、お店の方からの感謝の声が多かったこと、新聞に大きく取り上げられたことなどから、児童は自分たちの学びに誇りを持つことができた。

本実践は、2016年3月に終了したが、2017年5月にアルコを訪れたところ、空き店舗で新たなイベントとしてぬり絵教室が開催されていた。開催者は、薬局店の店主らであり、これまでに行っていなかったイベントを実施している意図を尋ねたところ、「新しい家族連れも来るようになったんやから、ここで終わらせたらダメなんや。」という答えが返ってきた。昨年度の取り組みから、継続的に地域住民とつながる場を今後も設定していきたいという思いが芽生えたようである。児童が学習を通し、活性化に本気で取り組んでいる姿を見て、結果的にアルコで働く人々の心が動いた実践となった。

この結果が得られたのは、(1)児童が実社会とのリアルな課題に触れ、(2)児童が本気で社会に働きかけ、(3)児童の本気に触発された大人が行動を起こしたことによる化学反応であると言える。この3つのプロセスは、実践に関わる全ての人が、同じゴールに向かって本気で取り組むために必要な条件ではないだろうか。今後もこのことを念頭に授業デザインを行っていきたい。

## 4. 今後の課題

本実践を進めていく際の時間の都合上、児童がアイデアとして出してきた取り組みを全て実現することはできなかった。本実践が本格的にスタートしたのは、10月に入ってからであったためである。年度当初より、実践の計画を行っていたものの、初めての取り組みということで、アルコの方々や関係各所との関係構築に時間を要したためである。同様の実践を行う際には、年度当初より活動を行い、ゆとりを持った計画を立てていくことが必要であると言える。

また、この実践を行った結果、アルコをはじめとして、本校と新たなつながりを生み出すことができた。この新たなつながりが、一年の単発的な取り組みではなく、継続して行うために本校における第三学年の教育課程を見直す際の視座としていきたいと考えている。